

BOOK REVIEW

書評
「なぜからはじまる体の科学「感じる・考える」編」
加藤総夫 著 保育社
「なぜからはじまる体の科学「成長する」編」
鯉淵典之 著 保育社

小野富三人（大阪医科薬科大学医学部生理学教室）

今回のBOOK REVIEWでは、第83巻1号で採り上げた「なぜからはじまる体の科学」「見る」編「食べる・出す」編に続くシリーズとして発刊された児童書を2冊採り上げます。著者は、本学会でも副理事長や教育委員長・学術研究委員長として活躍された鯉淵典之先生と加藤総夫先生です。主に中学・高校の図書室に置かれることを目指して出版されたこの2冊を小野富三人先生に紹介していただきました。



表紙を見た時、そしてパラパラとページをめくってみた時に目に飛び込んでくるのは、感じる・考える編では、明るく呑気そうで、アニメのサXエさんを彷彿とさせるような20代くらいの女性と、そのペット(?)の可愛らしい赤いタコ、成長する編では同じくアニメののX太くんのような素直そうな男の子とそのパートナーの小ぶりの象だ。タコと象は、読者を神経科学や成長・加齢の世界へと誘う案内役であり、狂言回しでもある。いろんなシチュエーションで、飼い主と協力して体の働きを解き明かしてくれる。

姉妹本である両書共、中学校や高校の図書室に置かれることを意図したシリーズとのことだが、医学・医療系の学生向けの生理学の教科書として読むことも可能である。しかし、生理学の教科書としては異色の一冊である。一見すると児童書のようにも見えるし、中高生向けのイラストの多い参考書のようにも見える。それが文章を読んでも、まるで標準的な医学の教科書のような、かなり深掘りしたしっかりした説明が書いてある。

ただそうはいっても抽象的な内容に終始するのではなく、必ず日常生活で出会う現象や疑問から説き起こす立て付けになっている。

医学部、看護学部、専門学校などで生理学を学ぶ学生が、いざ勉強しようと教科書に直面した時、まず威圧されてしまうのがその分量であり、一見とっつきにくそうに見える図と、隙間なくぎっしり詰まった文章である。その意味で、本書のようなアプローチは学生たちの生理学への最初の一歩としても有効な手段に思える。

私自身、神経科学が専門だからというものもあるが、一番印象に残ったのが、感じる・考える編の中程に出てくる“脳を作ってみよう”のコーナーである。詳しくは実際に本書を手にとってみていただきたいが、古新聞とチラシ、トイレトペーパーの芯を使って脳を自分の手で作ってみようという趣向だ。例えば脳神経などの名前、機能、位置を覚えようと悪戦苦闘している学生たちを日頃から見ていると、この“作る”というプロセスは、

解剖学実習での構造を“掘り出す”作業を、見事に補完してくれるように思われる。読んでいるうちに自分でも脳を作ってみたくなるし、一部は粘土にしてみたらどうだろう、とか、粘土も色違いにして部位別に色を変えたらどうだろう、とかやりたいことがドンドン増えてくる。学生たちもおんなじように感じてくれたらしめたものだ。

ここに書いた読み方以外にも、高校生や中学生が読んでも彼らは彼らなりの受け取り方があるだろうし、そこから専門書へと進んでいく子いるかもしれない。いろんな年齢や興味、バックグラウンドの若者に読んでもらって、一人一人の反応を見たくなる、そんな2冊である。